



新年の挨拶 理事長 安住 祥 生態系保全対策の積極的な推進

報道によると、本年6月1日に施行予定の「特定外来生物被害防止条例」に「特定外来生物」として、ブラックバス的一种である「オオクチバス」が指定される見通しとなり、シナイモツゴの保護と増殖、そして生息域の拡大を目指す私どもとして朗報となります。

さて平成16年は郷の会にとって充実した1年でありました。

先ず9月に郷の会の地道な活動が認められ、宮城県より「非営利活動法人」として認証を受けたことであり、11月20日にシナイモツゴ郷の会がNPO法人設立を記念して、「生態系保全とブラックバス対策」をテーマにシンポジウムを開催したことです。

淡水魚研究の第一人者である、近畿大学細谷和海教授を座長に外来種、移入種対策で最先端の研究に携わっておられる大学教授、環境保護団体職員と研究員から貴重な研究成果、意見提言を拝聴できました。

当日は土曜日の午後にもかかわらず、鹿野町長、門間議会議長、行政区長、小中学校教職員、婦人会役員などの参加を得ました。自然保護活動への関心の高さをうかがい知ることができ今後の活動への励みになりました。

また、郷の会副理事長高橋清孝さんが、職掌柄とはいえ、ブラックバス駆除方法と器具の開発が漁業資源の回復と生態系保全に大いに貢献されたと、宮城県浅野知事より県職員の模範として褒状を受けられました。心より敬意を表します。

17年度は、行政、一般住民と住民が属する各種団体との連携を密にして、実効のある自然保護、生態系保全のためのブラックバス駆除活動を積極的に進めてまいります。

具体的には、小学校にビオトープ活動を積極的に進められるよう人的・物的な援助を進めて、自然を大切に、緑を守り育てる心を育てていきたい。

ブラックバス駆除のための池干しには、小中学校への参加呼びかけは従前と同じですが、本年は青少年健全育成団体にも積極的に呼びかけ、ブラックバス駆除の実態、生態系保全の大切なことを体験させたいと考えています。これらの活動を通して昔ながらの水生昆虫の棲む湖沼、淡水魚の魚影が見える小川、そして緑豊かな自然環境の復元と創造を進めて次代の子ども達に引き継いでまいります。

NPO法人シナイモツゴの郷の会

平成17年度事業計画

- | | | |
|----|------------------------|--------------|
| 1 | 理事会(毎月第三土曜日) | 1~12月 |
| 2 | 移動研修会 | 4月 福島県 |
| 3 | シナイモツゴ人工繁殖 | 4月~ 町内ため池 |
| 4 | 里親制度の確立 | |
| | 学校池での繁殖と飼育 | 4月~ 鹿島台・仙台など |
| | 里親へシナイモツゴの配布 | 9月 |
| 5 | シナイモツゴ生息池の拡大 | 4月~ |
| | ブラックバス駆除池への放流 | |
| 6 | 池干しによるブラックバス駆除 | 9月 |
| 7 | 伊豆沼バス駆除作戦、バス・バスターズへの参加 | |
| | 人工産卵床、稚魚すくい | 1月~ 伊豆沼 |
| | 駆除装置の開発と改良 | 1月~ 伊豆沼 |
| 8 | 桂沢・生袋ため池調査 | 10月 |
| 9 | ひし栽培試験 | 3月~ 試験池 |
| 10 | 研修会開催 | 11月 学童農園 |
| 11 | 文化祭出展 | 11月 |
| 12 | 他団体との交流 | |
| | ため池フォーラム全国大会への参加など | |
| 13 | シナイ通信の発行 | |
| | 第7号(2月)と8号(8月) | |
| 14 | 総会 | H18年2月 |

平成17年度 会費納入のお願い

本会は会員の年会費で運営しています。

全て郵便振込みでお願いします。

振込用紙は公民館にあります。

正会員 2,000円

賛助会員

個人 1,000円

環境省オオクチバス指定(特定外来生物被害防止法)バス駆除を地域ぐるみで

シナイモツゴの保護などにより豊かな自然を守り復元しようという趣旨で本会は発足しました。2001年、シナイモツゴ生息池にオオクチバスが侵入したことが確認されたことを受け、これを駆除するのが直接的な契機でした。それ以来、池干しや伊豆沼バス・バスターズへ中核部隊として参加し、さらにはシンポジウムの開催などを通じてバス駆除による生態系復元と積極的に取り組み、その必要性を訴えてまいりました。私たちの活動は新聞などで全国的に紹介され、先進的な事例として高く評価されています。

環境省は1月31日、紆余曲折を経て特定外来生物被害防止法にオオクチバスを指定することを決定しました。バス釣り業界の意向で指定が先送りにされそうになったのですが、環境大臣の「指定すべき」という発言を受けて一転して指定されることになりました。私たちはこの決定を全面的に支持します。外来魚小委員会でバスによる被害の実態を整理公表された魚類学会会員、特に速やかな指定を強く主張され最後まで延期に反対された近畿大学細谷教授(2004年11月20日開催の郷の会シンポジウム座長)や「生態系保全より経済活動を優先する動きを決して許してはならない」という世論を代弁した新聞各紙に対し、深く謝意を表します。

しかしながら、ブラックバスが全国の津々浦々にはびこって貴重な生き物を食い荒らしているという現実がこれによりすぐ変わることはありません。バスの影響はあまりにも広範囲に及ぶことから、これまでのような行政と漁業者中心のバス退治では限界があり、今後は市民参加による駆除体制を構築する必要があります。郷の会は人工産卵床(伊豆沼方式)の改良や技術の普及などを通じて市民運動としての全国的な定着を図ります。

私たちは、バス釣り人の参加を拒みません。昨年9月、郷の会などが池干したため池はこれまで中学生などのバス釣りスポットで、毎年バス稚魚の大量繁殖が確認されて

いました。池干しで漁獲されたブラックバスを計測したところ30cm以上の大型ブラックバスと当年生まれの稚魚はほとんど見られませんでした。バス再放流禁止(平成16年宮城県内水面漁場管理委員会指示)を受けて、中学生などの釣り人が釣ったブラックバスを処分したことによりバス親魚が取り除かれた結果、産卵もなくなったと考えられます。この結果はキャッチアンドリリースを止める事により繁殖を抑止した初めての事例であり、再放流禁止の効果事例として極めて重要です。釣り業界は今回の指定を受けて自己中心的な再放流(キャッチアンドリリース)を改め、駆除を前提としたバス釣りを奨励すべきです。国や自治体は早急にリリース禁止を規則化すべきです。バスの完全駆除には長期を要するわけだから、駆除という大目的でバス釣りをすれば、今以上に楽しい釣りが出来るはずで

す。郷の会は今後も、池干しと伊豆沼バス・バスターズへの参加を通じてバス駆除と取り組んでいきます。同時に、シナイモツゴの里親運動を県内各地で展開しバス駆除した池へ放流することにより駆除後の生態系復元を目指します。さらに、出版活動やシンポジウムの参加・開催により、水域生態系保全の重要性を訴え保全手法を紹介していきたいと考えています。 高橋



伊豆沼バス・バスターズの中核部隊として活躍する郷の会会員たち

シナイモツゴの里親になりませんか 里親制度のルール作り進行中

本会ではシナイモツゴの保護を図る目的で、シナイモツゴを家庭で飼育繁殖をしていただく里親を募集することにしてますが、現在そのためのルール作りを進めているところです。

シナイモツゴは県内全域ですでに絶滅したと考えられていましたが、ご存じのように、高橋博士により町内のため池で再発見されました。品井沼ゆかりの模式産地種として学術的にも貴重であり、現在、町指定天然記念物として保護されています。本会では、町の宝であるシナイモツゴを守るために、生息地の環境保全とそれ以外の場所での繁殖を試みてまいりました。その一環として、地元の小中学校などでも、本会の支援のもとにすでに飼育されていますが、卵の採取、ふ化、稚魚の飼育に見通しがついてまいりましたので、今年9月から、学校以外での里親制度を本格的にスタートさせようとしております。

しかし、シナイモツゴは環境省カテゴリーの絶滅危惧ⅠB類であり、全国的にも絶滅の危機にさらされていることには変わりありませんので、里親制度にはきちんとした目的、ルールが必要です。特に単なる飼育に終ったり、営利目的の飼育になることは避けたいと考えています。里親として飼育する目的を十分ご理解いただくように、また、飼育中にも常に本会と連絡が取りあえるよう

に、里親になられる方には本会の賛助会員になっていただくことが望ましいと考えています。

自然はそれ自体、人の心を和ませてくれるものですが、シナイモツゴを育てることにより、郷土の豊かな自然、そして生態系を守る取り組みに多くの方に積極的にご参加いただきたいと思っています。

二宮



郷の会開発のシナイモツゴ産卵ポット！

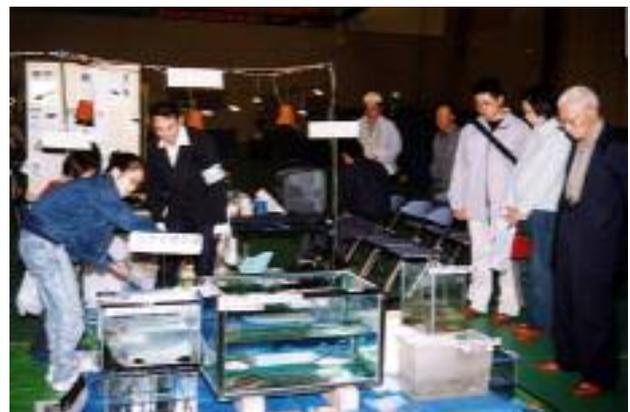
第25回町民文化祭に参加して

今年で3回目の文化祭に参加し、みんなで守ろうシナイモツゴ、ふやそうシナイモツゴ、を町民みなさんに知ってもらおうと昨年以上に工夫をこらして、たくさんの魚、貝やエビそして昔懐かしいヒシなどを立体的に展示しました。

シナイモツゴ郷の会の活動を写真で紹介したコーナー・池干しの際、拾い集めた実物の擬餌針(ルアー)展示、シナイモツゴの産卵用にシナイモツゴ郷の会会員が開発に成功した画期的な産卵用ポットの立体展示の外、ビデオ放映では「よみがえれ日本の淡水魚」「志田郡音楽祭のシナイモツゴの歌(鹿島台小4年)」「NHK てれまさむね、鹿島台特集」を放映しました。

生きた魚の展示コーナーでは鹿島台の天然記念物シナイモツゴを筆頭に、メダカ、ギバチ(ギクバチ)、エビ「ヌカエビ」「スジエビ」、二枚貝のドブガイ、巻貝タニシ(ツブ)やカワニナ(ホタルの幼虫のエサ)など品井沼の在来種、オオクチバス(ブラックバス)、ブルーギル(北アメリカ原産)、タイリクバラタナゴ(中国原産)、タモロコ(関西地方)等の魚やアメリカザリガニ(北米)とウシガエル(食用ガエル:北米)等を生きたまま展示しました。その他、品井沼名物のヒシ(むかし貴重な食糧であった)も葉の付いたままの展示です。

来館された多くの方々が展示に関心を持ち、会員にいろいろ質問をされました。展示の魚や貝が鹿島台に居るのですかとか、みんな食べられますかと言う質問が多くありました。展示のヒシを見てなんだかわからない若いお母さんからの質問も多く、むかしはヒシご飯にして普通に食べていたと話すとなんか驚いた様子でした。シナイモツゴ郷の会の活動をより多くの町民のみなさんに知ってもらうためにも文化祭参加に力を注いで行きたいと思えます。 みうら



たくさんの魚・・・思い出すのは昔の品井沼？

第 6 5 回ふるさと懇談会 「知事さん、あのね・・・」 出席報告

I あるものさがし夢トーク [H17. 1. 20(木)10時50分、11時50分 鹿島台町学童農園]

「協働社会をめざして…ひとづくり、ちいきづくり、まちづくり」をテーマに、浅野知事の司会進行のもと、鹿野町長が同席し、参加者(次の6人)は各々活動の過去、現在、未来について、説明し、それぞれの事情を訴えた。

千葉 卓也 ((有)マルセンファーム代表)大浦 實 (NPO 法人シナイモツゴ郷の会)

佐々木憲枝 (NPO 法人ビッグベル理事長) 櫻井 寿美 (共に福祉を考える会つくしの会事務局長)後藤みき(特定非営利活動法人 みやぎアイアイ鹿社会理事長) 中村加代子 (バンビーズ代表)

私は

① シナイモツゴの発見～再発見～シナイモツゴ郷の会の結成～活動の内容を紹介し、みやぎ NPO 夢ファンドの助成により、NPO 法人設立記念シンポジウムを開催できたことを感謝した。

また、高橋副理事長が知事褒賞を戴いた事を誇りに思うと述べ、鹿島台町にも同様規定があるといいな、と注文した。

② 再発見後、鹿島台町の迅速な天然記念物指定と保護対策、シナイモツゴ郷の会発足後は町の全面的なバックアップによって、種々のイベントをこなし、シナイモツゴの知名度も少しは上がって来ているので、新しい市・宮城県天然記念物になればな、と言った。

③ 子供達にお話しするとき“朝ごはん食べれば→うんこ、オシッコ”“息を吐けば→CO₂”皆な

の周りが環境そのものだよ、そこから始まるんだよ、と言う。私達は、シナイモツゴを通して鹿島台町の豊かな自然を後の世に残そうとしている。「知事さん、百年先を見通して、戦後の仙台に二番丁通を造った先人のような仕事をお願いします」

④ 朝刊各紙(1月20日付)によると、「オオクチバスは“特定外来生物被害防止法に5月施行”への指定を半年間先送りする」とのこと、これは大問題だ、知事をお願いしたい《首相、あのね・・・》のチャンスをつくり、《オオクチバスを指定魚種に入れてほしい》と言って頂きたい。(その後、曲折があったものの1月31日の環境省の専門家全体会で法施行時の規制対象に、

オオクチバスを含めた動植物37種が決まり、リストが発表された)

⑤ 後継者育成を始め、殆どどの行事の経費は、会員の自



知事と町長を囲む、後列右から2人目が大浦氏

弁となっている。17年度は・・・重機作業の予定もあり、定期的な車での移動もあるので、保険費用、ガソリン代等を当会負担とする話も実現する必要がある。いろんな面で、努力していく必要がある・・・などと話した。

II 懇談会(13時30分～15時30分 鎌田記念ホール)

「いきいき安心かしまだい」をテーマに、浅野知事の司会進行のもと、県議、県関係者、町三役、議長、教育長、総務課長が同席し、町民200余名を前に、今野文隆(産業部門)、中村喜恵(福祉部門) 笠原啓二(地域づくり部門)の各氏が意見を述べた。

① 当会の安住理事長は、指名を受け「シナイモツゴ郷の会およびブラックバス」についてお話しされた。

② 知事は「障害のある本人に“どうしたいの?どこに住みたいの?と県として直接聞いた事がない、反省する」「今日の会場の皆さんは、素晴らしい、自分からどんどん手をあげて、話をする、知事さんあのねをやって初めての事だ、嬉しい。」「発言出来なかった方は知事への手紙で言ってほしい、すべて自分で読みます。」

III 私的に言えば準備した資料の5%程度しか言えなかった。時間がたりなかった。IIについても知事の外せない用務のための、予定時間での打ち切りがなければ、鹿島台町民の本音の面白い“あのね・・・”が聞けたらうにと、心残りである。大浦

シナイモツゴ郷の会 NPO 法人設立記念シンポジウム開催（2004年11月20日）

「生態系保全とブラックバス対策」

平成16年11月20日に鹿島台町鎌田記念ホールでシナイモツゴ郷の会始まって以来の大イベントが開催されました。全国的なイベントであるため、準備は何ヶ月も前から開始されました。5月に宮城県のみやぎ NPO 夢ファンド助成金を獲得したのを皮切りに、7月には実行委員会が結成され、全国規模でのPRや駅前への看板の設置、講演の資料作りなど、作業は平日休日を問わず急ピッチで進められました。特に賛助会員の募集や協賛金のお願いには平日の貴重な時間であるにも関わらず、何人もの会員



のPR作戦が展開され、予想を上回る協賛金が集まりました。

これらの努力なしでシンポジウムなど到底開くことは出来なかったでしょう。

シンポジウム当日は180名もの参加者が集まりました。初めに安住理事長がシンポジウムの開催趣旨や郷の会の紹介を述べられ、その後講演が始まりました。講師の方々も錚々たるメンバーです。ブラックバス問題の先進地である滋賀県立琵琶湖博物館の中井先生を初めに、種の系統保存に関する研究をしている近畿大学の細谷先生、そしてモツゴとシナイモツゴの交雑に関する研究をしている信州大学の高田先生には遠路はるばるお越し頂きました。また、バス・バスターズ等の取り組みを行っている宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団の嶋田氏と進東氏、そして宮城県内水面水産試験場の小畑氏にも貴重なご講演を頂きました。我が郷の会からは、本シンポジウムの呼び掛け人でもある高橋副理事長と須藤氏によるブラックバス被害の報告や、大浦氏と坂本による郷の会の活動報告

が行われました。また、最後の総合討論では会場からも活発な意見が次々と出され、非常に有意義な討論となりました。

シンポジウム終了後は場所を学童農園に移し、情報交換会が行われました。まず、食生活改善推進委員の方々がこの日のために作ってくださった郷土料理で腹ごしらえです。品井沼で昔よく採れたヒシを使った炊き込みご飯や伊豆沼周辺の地域に伝わるエビ餅などが大きな木のテーブルに並べられ、それぞれ料理がどこか懐かしい味と雰囲気を感じ、会場からは「うまい！！」と絶賛する声が多くあがりました。大自然とうまい料理とが功を奏し、すっかりアットホームな雰囲気になった情報交換会は、シンポジウムに負けないくらい大いに盛り上がりました。討論はとどまるところを知らず、予定の倍の4時間近く続きました。さらにそれでも熱は収まらず、結局交流会会場の灯りが消えたのは午前3時を回ってからでした・・・。

さて、翌日は見学会が催されました。昨日の疲れも何のその、みんな元気に出発です。観光案内は平成の鎌田三之助である伊藤先生がつぎはぎの服にござをかっただ格好で説明してくださいました。まずはみちのく路から旧品井沼の全景を眺め、次にシナイモツゴの生息地の1つである桂沢に向かいました。シナイモツゴやゼニタナゴのためにもこのため池は守っていかなければなりません。そして最後に明治潜穴です。海面との高低差が小さく、旧品井沼へ注ぎ込んでいた水を海へ流すのは大変な作業だったと思います。見学会が終了するといよいよ別れの時です。別れを惜しみながらもこの2日間の思い出を胸にそれぞれの帰路に着きました。

今回のシンポジウムを通して、シナイモツゴやブラックバスの最先端の研究に触れることができ、より深い知識が得られました。また全国の様々な人々と交流でき、同じ志をもつ仲間がたくさんいるとわかったこともかなりの収穫だったと思います。今後はシンポジウムで得られた知識やネットワークを活かし、郷の会の活動をより多くの人に知ってもらおうよう、そしてシナイモツゴが安心して暮らせる環境が作れるよう尚一層の努力をしていきたいと思いません。 坂本

NPOの時代だ

..... ため池研修会に参加して

平成16年11月16日(火)13:30

宮城県庁 2階講堂

みどり
主催:宮城県・水土里ネットみやぎ

みどり
— 水土里 のふるさと、ため池再生へのプロローグ — と
いうテーマの通り、この研修会は、ため池の持つ多面的な機能
を見直し、これからのため池整備のあり方を検討することを目的
に開催されました。つまりため池には、田圃の水を確保するだけ
ではなく、洪水を防ぎ、たくさんの生き物のすみかとなり、さらには
私達に憩いの場をもたらしてくれるなど、いろいろな役目があり、
これを活かしていきたいと思います。

この研修会で、坂本啓、大浦實両会員が講演するので、郷の
会は仙台まで応援に行きました。県庁に着くと、控え室の二人は、
この期に及んで原稿に手を入れるという余裕ぶり。一方、会場の
講堂は、背広姿の農業土木関係担当者で埋まり、見慣れた自然
保護系の集会とはまた違った雰囲気です。

さて講演では、安住理事長のひと言に続き、「ため池の生態系

わけ
求めた時、若 ^{わけ}スターズをも取り込んで、行政の全面的支援を
背景に嵐(騒動か?)を巻き起こした、との分析は妥当と言えま
す。

さて研修会では、白石市鹿の子ため池周辺整備、七ヶ浜

予 告
全国ため池フォーラム in みやぎ
平成17年10月19日(水)~20日(木)
宮城県民会館

町阿川沼の水質保全、という2つの事例発表がありました。
どちらの事例も、ため池を地域の資源と据え、身近な住環
境として周辺住民が関わっていくことが必要とされており、
その中でNPOが重要な役割を担っていました。宮城県に
は、全国7位という6000ヶ所のため池があります。私達
は、広くて長い目を持って「ため池」を見ていかななくてはな
りません。住民参加という点で、これからの公共事業のあ
り方も変わっていくのかな、と思わせた、有意義な研修会
でした。 石井



ツボケ沢ため池の池干し 2004年9月

保存と復元」と題して、シナイモツゴ郷の会の活動を中心に、崩
壊寸前の生態系の現状と、復元への提案が、おなじみの坂本
節・大浦節で語られました。大人も子供も泥んこではしゃぐ池干
しの画面とともに、ため池復元は人間性の復活なりと訴えた結び
が、満場の人々の心に響いた筈です。

質疑応答で、ひとつの質問が出ました。こんな地味な魚で、ど
うして地域が盛り上がったのか?..... 然り、白神山地のクマ
ゲラの如く派手なキャラクターにはなり難いこの魚を、実は私も
疑問に思っていたのです。その答えは、水と戦ってきた鹿島台と、
干拓の歴史を語る品井沼にありました。沼の名を冠した小さな魚
に郷土の誇りを見出した、ナイスミドル&シルバー達の熱き想い
が、これと言った名所や特産のない我が町に新たなシンボルを



水位が回復した池に魚を戻す子供たち

見ましたか?! シナイモツゴPR 大看板

平成16年11月13日、鹿島台駅前広場に
大看板が出現、駅を利用する人々を驚か
せました。勇ましいシナイモツゴ雄の大き
な写真入りです。まだ見てない方は、是
非、ご覧ください。

町子連行事の地引網実施について

平成16年度の行事のうち、中学生を対象とした健全育成の一環として、シナイモツゴ郷の会(郷の会)との共催により実施しました。地引網についてその実施概要を申し上げます。

本町天然記念物(シナイモツゴ)の絶滅防止と増殖並びに外来魚(ブラックバス等)の駆除に関する体験学習を通して、自然環境保護と在来の淡水魚の生態系を探る目的で行われました。

1. 日時 平成16年9月5日(日)午前9時から午後3時まで
2. 場所 鹿島台町広長地区(坪ヶ沢溜池)
3. 参加者 広長行政区長外 山谷 広長 元鹿島台地域育成会長外 小、中学生及び PTA、町子連役員 郷の会会長外 広長地域食改推進員 総数100名

本行事開催については事前に、郷の会との協議を重ね、広長行政区長、広長実行組合長等地元の関係者との理解と協力の中で進めて来ました。

溜池は農業用水確保としての必要性があり、稲作管理の登熟期を想定し落水期との適期判断により日程調整のうえ実施しました。

なお、開催当日の時間的設定を配慮し昼食準備のこともあり、食事に関しては町子連役員(主として女性)を中心に、広長、山谷地区の食生活改善推進員及び PTA 役員等による炊飯、お握りづくり、豚汁づくりと野外を重視した内容とし、器物は公民館或いは集落からも御協力をいただきました。

当日は天候にも恵まれ、溜池用水の一部が残っている程度に排水され、地引網が仕掛けられ郷の会の方々が胴長ゴム靴の仕度、参加者が掛け声とともに手繰ると、勢いのある鯉は網から跳ね上がり、地引網の中心にいる郷の会の方々は、胸までの泥水をものともせず、顔面泥まみれながらも網を手繰り浅瀬に寄せると大小の獲物は、大きいのは鯉だったが、その大部分はブラックバスで、その繁殖力に驚きました。

中には同じ体長のもを共食いしておりびっくりいたしました。

坪ヶ沢溜池は、大小の二つからなっており、林に囲まれた上流部は小さな溜池で、下流部は大きな溜池となっております。

下流部の地引網は午前中に終わり、準備されたお握りと豚汁をシートの座敷にておいしくいただきました。

午後は、上流部の小さい溜池での地引の結果は、小さ

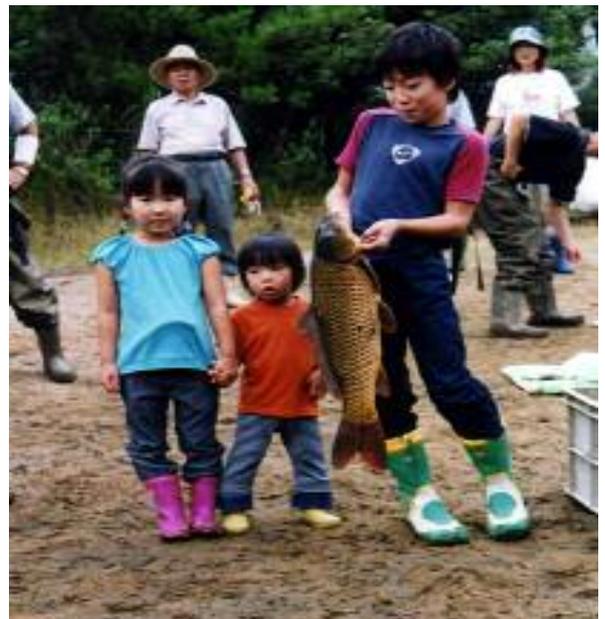
鹿島台町子ども会育成連合会長 公平弘司

なブラックバスのみで在来魚は皆無の状態に如何に生態系が破壊されているのかと考えを深くしております。

おわりに、このような行事から自然環境の変化に驚くと共に、今後こうした事態にどう対応すべきなのか、関係する皆々様の知恵と一刻も早い対策を期待しております。

共催にあずかりました郷の会の皆さん、地域の方々、更には食改推進員の皆さん方の多大なる御指導と御力添いに対し、厚く感謝と御礼を申し上げます。

私たちの住んでいる地域や自然環境に注目すると共に、子どもの健全育成のため更に体験を深めて行きたいとお願いしております。



大きなコイにビックリ、ニッコリ
楽しい池干しでした

合同シンポジウム

子孫に残そう日本の自然を
～つくろう、ブラックバス駆除ネットワーク～

3月12日11時～ 立教大学ウエルネス研究所

●基調講演:小池環境大臣

「環境と共存する経済」

●提言と現場報告:

シナイモツゴ郷の会高橋副理事長

「地域ぐるみの外来魚駆除」他5名の報告

●パネルディスカッション:

桜井よし子

細谷和海近畿大教授 他4名

「 鹿島台小学校4年生の感想文 」 -8月30日(月)野外学習より- 「 ビオトープ 」

小松 伊織

今日、ビオトープというところに行きました。ビオトープは、どろぬまでした。中に入ると、ねん土をふんだようなかんしよくで少し気持ち悪かったです。でも、なれてくると楽しくなって来ました。小さい魚がたくさんとれました。一番最後に大地くんが机の半分ぐらいある大きい魚をとったのでみんなびっくりしてしまいました。でも、その魚はぬまににがして来ました。シナイモツゴやタナゴもとれました。ビオトープは、ちょっとぬまの中がぬるぬるしてて気持ち悪かったけど魚がいっぱいとれてとっても楽しかったです。



シナイモツゴの卵・・・今年も育てよう、シナイモツゴ

後藤 聡美

今日、横山ビオトープに行きました。歩いて10分ぐらいで行きました。そこはぬまのような、小さな池のような所です。それで魚をあみで、とるために、そのぬまのような、所にはだして入りました。かんしよくは、けっこうきもちわるいです。あみで草むらの所をあさったりして、タナゴや、メダカや小さなザリガニなどがあみでとれました。大地君は、シナイモツゴをとりました。さいごらへんで、諄君が、ぬまの大きなぬしを見つけて、大地君があみでさがしてとりました。すごく大きかったです。また、横山ビオトープに、行きたいです。

てるい たかし

ついたときは、「こんなところに魚がいるのかなあ?」なんて思っていたけど、けっこう魚がいました。でもぼくは、魚をとるより、虫を観察するほうが好きだったので、草むらをながめていたら、バッタがいました。つかまえてにがしました。カタツムリも、いました。六びきいました。のこり2分のところで、大地くんがおおものをとらえました。30センチメートルぐらいありました。にがしてかえってきました。楽しかったです。

佐藤 匠

今日、ぼくは、ビオトープに行ってきました。見ためはただの池ですが、よく見ると、小さな魚がすいすいと泳いでいます。ぼくはさっそくあみで水をすくいました。すぐにメダカのちぎよがとれてきてそのあとにザリガニ・ヤゴ・ゲンゴロウ?のじゅん番にとれました。そのほかにタニシ・タナゴ・たがめ、そして、シナイモツゴ。ぼくは水そう見るとおどろきました。なんとタガメがザリガニの体えきをすっているのです。これぞまさに弱肉強食!びっくりしてるうちに大地くんが大きなコイをつかまえてきた。そのコイは元学校の池の主だったらしい。時間になって、ぼくたちはつかまえた魚をにがした魚たちは、しずかに自分たちのすみかにかえっていった。

今野 加菜

草木がボーボーと生えていて、「なんだこりゃ」と思った。かなと友とあいで、はだして入りました。ドロがグチャグチャしてきもかったです。小さな魚やザリガニのあかちゃんなどしかははじめはつかまえられませんでした。でも、私はドジョウがつかまえられてよかったです。キヤーキヤーいいながらも、と〜も、と〜も楽しかったです。

ヒシ栽培プロジェクト始動

品井沼名物ヒシを復元しようという画期的なプロジェクトが動き出しました。休耕田などを利用してヒシを栽培し、多くの方になつかしいヒシご飯を味わってもらおうというものです。あなたはヒシを食べたことがありますか?香り豊かなヒシを食べると、自然の恵みに心から「ありがとう」と言いたくなります。鹿島台町自慢のひし取り歌を聴きながら、ひし料理を食べようとプロジェクトメンバーは今から意気込んでいます。

あなたもプロジェクトに参加できます。

ヒシ栽培田第1回整備作業

時: 3月6日(日)9時

集合場所: 宮の沢ため池

詳しくは事務局にお問い合わせください。

シナイはアイヌ語で大きな川(沢)を意味します。小さな流れが大きな川になるように地道な活動を続けていきましょう。